ぼくたちの好きな戦争

小林信彦

ぼくたちの好きな戦争

小林信彦

新潮社

ぼくたちの好(す)きな戦争(せんそう)

●著者　小林信彦(こばやしのぶひこ)　●発行者　佐藤亮一
●印刷所　二光印刷株式会社　●製本所　加藤製本株式会社　●発行所　株式会社新潮社
〒162　東京都新宿区矢来町71　振替　東京4-808
電話　業務部(03)266-5111　編集部(03)266-5411
●1986年5月20日印刷　●1986年5月25日発行
定価1800円

© Nobuhiko Kobayashi, Printed in Japan, 1986
乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。
ISBN4-10-600646-4　C0393

目次

プロローグ　5
第一章　ダウンタウン　*1940*　17
第二章　南の風　57
第三章　楽園の日日　103
第四章　虚構（Ⅰ）　147
第五章　下町　一九四四　177
第六章　虚構（Ⅱ）　227
第七章　ベルガウル島　259
第八章　ナパーム焼夷弾または〈モロトフのパンかご〉　319
第九章　下町　一九四五　321
エピローグ　357

装幀　平野甲賀
装画・挿画　河村要助
見返地図　「画報躍進之日本」より（一部加筆）
本文地図　綜合精図研究所

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

ぼくたちの好きな戦争

プロローグ

暗闇のなかで、中尉は入江に放した鰐のことを考えた。
兵隊たちが鰐をつかまえたのは、敵海兵隊が上陸する数日まえだった。手製の檻に入れられた鰐は、あたえられる魚を食べずに不機嫌そうにしていた。兎の肉なら食べるかも知れないが、第一中隊にはそんな余裕がなかった。
第二中隊潰滅の報をきいて、彼は玉砕を決意した。ベルガウル島唯一の飛行場は敵の手に落ちている。彼は鰐を島の南端の入江に放すように命じた。
あの鰐は入江のどこかに潜んだだろうか。それともマングローブが繁る川筋を溯っていったか。トーチカの小さな覗き窓から中尉は米軍陣地の様子をうかがった。
夜襲を予期してか、照明弾がひっきりなしに打ち上げられている。昼のような明るさのなかに、数百メートルの範囲の地形が、気味が悪いほどくっきりと照らし出される。米軍は鉄条網を張りめぐらし、戦車を連ねて、厳重な警戒を続けていた。だが、中尉を打ちのめしたのは、なによりも、すさまじいまでに豊富な光の量だった。日本軍の常識として、彼は照明弾を信号弾ぐらいにしか考えていなかったのだ。
「敵に感知されましたか」

少尉が声をかけてきた。
「わからん」
第一中隊中隊長である中尉は双眼鏡を眼から離した。
「皇紀二千六百年式典のときの花電車を見たか」
「いえ、田舎におりましたので」
「あの花電車と提灯行列を合せたのよりも明るい。派手にやりおる」
「いかがですか」
少尉は何かを差し出した。匂いだけで、牛肉の大和煮の缶詰とわかった。
「豪華だな。酒のほかに缶詰もあったのか」
中尉は甘辛く煮た牛肉の一片をはがして、舌にのせ、心ゆくまで味わった。
「日本酒以外に敵さんの酒もあります。ジョニー・ウォーカーとジャック・ダニエルです」
「不思議だな」
「敵の小型輸送船が拿捕されたことがあります。台風で坐礁したのです。その時のものでしょう」
「トーチカというより酒保だな、ここは」
苦笑した中尉はコンクリートの壁を叩いた。厚さ八十センチの壁は拳に痛く、頼もしかった。
「照明弾が上っとる限り、身動きはできない。あるだけの酒を飲んで、夜明けを待とう」
「全員、その気でおります。もう、出来上ってる者もありますが」
「突撃のとき、へっぴり腰では困る。歩けなくなったりすると、もっと困る。九十名そろって、散華するのだ」
「わかっております」

少尉は茶碗酒をがぶりと飲んだ。
「なあ……」
中尉は少尉の名を呼んだ。
「なんでありますか」
「映画だと、ここらで支援の友軍が空陸から駆けつけてくるのだがな」
「まず無理でしょう」
「人生は出来の悪い映画のようなものだ、という格言がある。おれたちの映画も出来が悪かったようだな」
少し酔っているせいもあって、少尉は目頭が熱くなった。
「中隊長どの」
「なんだ」
「ごいっしょさせて頂ける自分は幸せ者であります」
「はは」
と、中尉は軽く躱した。
「靖国神社で会おう」
「自分は、東京の地理に、自信がありません。明治神宮へ行ってしまいそうです」
「明治神宮は駄目だ。あそこは明治天皇しか入れないし、表参道が長いので草臥れる」
この言葉に少尉の小鼻が痙攣し、一筋の涙が頬を伝った。
大きな洞窟を利用して作られたトーチカの中には、兵士たちの歌う「同期の桜」が低く流れ始めた。
——貴様とおれとは　同期の桜

同じベルガウルの　庭に咲く

「だれだ！」

少尉は涙を拭いながら、叫んだ。

「ア、ヨイショとか、ア、ソレとか、ア、ドシタなどと、間の手を入れたのは」

闇の奥から声が返ってきた。

「自分であります。少尉どのが、今夜は無礼講だから何をしてもいいと、おっしゃったので」

「たしかに言った。しかし、ものには限度というものがある。お前は『君が代』にまで間の手を入れるというではないか」

「申しわけありません」

「だいたい、宴会をやっとるのではないのだ。酒を飲みながらでもいい。辞世の句の一つもひねり出したらどうだ？」

辞世の句って何だ、という声がきこえた。和歌だよ、という声もした。少年雑誌の滑稽和歌みたいなものか、と訊く者もいた。

「この世への別れの気持、今の心境を、五七五七七、三十一文字に託すのだ」

いよいよわからない、という声がした。

「和歌とは――つまり、百人一首だ。百人一首ぐらいは知っとるだろ。あの形式に、おのおのの気持をこめるのだ。わかったな？」

少尉は残っていた「誉」をくわえ、マッチで火をつけた。

暗闇での喧騒が、いっとき、収まった。暗くて文字が書けない、とか、マッチを貸してくれ、といった囁きが続いた。気が散って構想がまとまらない、という呟きもききとれた。

「煙草の火を敵に見られないようにしろ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

中尉は傍らの少尉に言った。彼だけはアルコールを口にしていなかった。
「ところで、辞世の句は詠んだのか」
「はい」と少尉は答える。
「きかせてくれ」
「とんだ腰折れでして……中隊長どの、先にご披露ください」
「きかせるほどのものではない」と中尉は謙遜して、「でも、きかせようか」
「はっ」
「〈環礁に寄せくる波を眺めつつ　皇国の栄祈らむ我は〉……」
「万葉の風が自分の荒れ果てた心を洗うようです」と少尉は感想を述べた。「では、自分のを申し上げます」
ポケットから手帖を出し、万年筆型のライトを点じた。
「十月三日深更、玉砕を前にして詠める――〈大君の御楯となりて捨つる身と　思へどなほも神風を待つ〉」
「む、む」
「これは決して女々しい気持から詠んだものではありません。諦めてはいるが、しかし、やはり、神風が吹いて、鬼畜米英の艦船を沈めてはくれないものか、嗚呼――という祈りをこめたもので」
「わかっとる」
中尉は優しく頷いた。
「みんなの辞世をまとめてくれ。その手帖に書いておくがいい」
「わかりました」

少尉は一同の方を向いて、
「さあ、できた者は声をかけてくれ」
「はいはいはい！」
「はい、と言えばよい。もう、できたのか」
「できました」
「どういうのだ」
「照明弾を詠み込みまして……」
「能書はいいんだ、軍曹。ずばっと言ってくれ」
「申し上げます。〈夜を昼に変へるつもりか照明弾　ただありあけの月ぞ残れる〉」
「着眼はいいが、下の句が百人一首と同じじゃないか」
「そうか。偶然の一致でしょうか」
「莫迦たれ！」
うんざりしながらも、少尉は義務として、次々に披露される辞世の句を手帖に書きしるしていった。酒気を帯びた笑声の湧く中で、几帳面な彼は、句のあとに、自分の寸評を書きとめさえした。

天皇の御楯と誓ふ赤心に　かすかに浮ぶ靖国の門
世の中に絶えて桜のなかりせば　手持ち無沙汰か靖国の門
（注・前の和歌をからかったもの。上の句は、在原業平の盗用。）
あかねさす紫色の洞窟の　ヤモリは見ずや我が防人を
憂きことのなほこの上につもれかし　つもりつもりて淵となりぬる
（注・深い意味があるようでいて、よくわからない。）

天ざかるカナル(ガダルカナル)の友は何と見る　防人(さきもり)どものこの酒盛(さかもり)を
(注・ただの語呂合せか。)
身はたとひベルガウルの野辺に朽(く)ちぬとも　まだふみも見ず天の橋立
(注・例として小倉百人一首を挙げたのがいけなかった。)
わが庵(いほ)は男世帯に蛆(うじ)が湧く　そを蛆山と人はいふなり
世の中はつねにもがもが渚こぐ　ころものたてはほころびにけり
(注・敗北の心を詠んでいるようだが、上の句がいまひとつ不明瞭。)
数ならぬ身とは思へど数のうち　醜(しこ)の御楯(みたて)と悟りきれずに
(注・軟弱者めが。)
トーチカの遠く近くに敵充ちて　夜明けと共にはいそれ迄よ
月見ればちぢにものこそ悲しけれ　わが身ひとつがちりぢりばらばら
ちはやぶる神も仏もない気分　糧秣(りやうまつ)もなく援軍もなく
ジャック・ダニエル飲みつつ米(べい)必殺を誓ふ　これは矛盾か文句があつか
(注・べつに文句はないが、品がない。)
豊葦原(とよあしはら)の瑞穂(みづほ)の国の行き倒れ　はげしかれとは祈らぬものを
(注・これ以上日本国民が食糧難に苦しまなければよいがなあ、という気持をうたったもの。)
李香蘭のよがり声をば想ひつつ　醜(しこ)の御楯(みたて)はもだえ苦しむ
(注・李香蘭は大陸の美人女優。前線兵士の性の悩みをうたいしもの。)
なにしおはば逢坂山のさねかづら　さねのかたちでわかりぬるぬる
(注・〈さねかづら〉の〈さね〉は〈さ寝〉に掛けたものであるが、全体の意味は不明。)
敷島(しきしま)の大和心(やまとごころ)を人問はば　玉と砕けてはらほろひれはれ

〈海兵隊員たちは、日本軍が別れの杯を交しているであろうところの叫び、喚き、けたたましい笑い、そして瓶の毀れる音を聞くことができた。いかにバンザイ突撃を準備しているとはいえ、海兵隊砲兵陣地にごく近いトーチカ――狂気じみた笑い声によってその存在が判ったのであるが――で乱痴気パーティーをおこなう大胆さ、騒がしさは、のちに誰かが《動物園におけるニュー・イヤーズ・イヴのように響いた》と、表現したほどである。きたるべき攻撃に備えて、海兵隊は37ミリ砲、81ミリおよび60ミリ臼砲、機銃、小銃および手榴弾を用意した。トーチカに対しては75ミリパック・ハウザー砲が有用であると考えられた。……〉

（米海兵隊戦史「ペルガウル島の奪取」より）

酒宴は狼藉に近い状態にあった。ただひとり超然としていた中隊長も、緊張に耐え兼ねて日本酒を呷り、にやにやし始めた。アルコールに弱い体質なのだ。

あとの八十九名は踊り狂っていた。歌は「わたしこの頃変なのよ」で始まり、「愛してちょうだい」に変り、「侍ニッポン」から「満州娘」「別れのブルース」「湯島の白梅」を経て、石田一松作詞・作曲の「酋長の娘」になると、約三十名が上半身はだかになった。いつの間にか、天井の石油ランプに灯が点されている。

少尉は石油ランプに気づいた。消せ、と命令しようとしたが、声が出ない。這って行こうとすると、空の一升瓶の群れに身体が乗ってしまった。身体が床からわずかに浮いた感じで水平になっている。

「灯りを消せ！」

ようやく、声が出た。とたんに、裸姿の二人が抱き合ったまま、彼の頭に倒れてきた。

――色は黒いが　南洋じゃ美人
――ア、ドシタ
それから、男女の掛け合いが入る「煙草屋の娘」になり、どういう具合なのか、「比島決戦の歌」になった。新しい歌なので、〈決戦かがやく　アジアの曙……〉という歌詞は数人しか知らなかったが、次の部分だけは全員がうたえた。
――出てこいニミッツ　マッカーサー！
――ア、ソレ
――出てくりゃ　地獄へ逆落し！
――サノヨイヨイ
これではいかん、と少尉は思った。酔いがまわって、坐り込んだり、吐いたりする者が続出している。これでは玉砕は覚束ない。
「ランプを消すのだ！　敵に見つかったらどうする」
「うるせえな、てめえ。消しゃいいんだろ、消しゃ」
一人がふらふらとランプをつかみ、吹き消して、覗き窓から外に投げた。ガラスの割れる音がして、外が明るくなる。灯が完全に消えていなかったらしい。
次の瞬間、幾つもの太陽が発するような閃光と熱風がトーチカの中を走り、灼熱の炎が全員を包んだ。
なにが起ったのか、少尉はとっさには把握できなかった。ただ、熱風が敵によってもたらされたことだけはわかった。炎のなかで彼は中隊長の身体をつかみあげ、トーチカの外に引きずり出して、毛布で火を消した。
「中隊長どの、傷は浅いです」

毛布ごと抱き起そうとすると、手応えがおかしかった。まるで身体が縮んだようである。毛布を剝いでみると、首がなかった。

トーチカをふりかえると、火の海だった。

「おれに続け！」

少尉は軍刀を抜こうとしたが、あるはずのものがなかった。先刻の混乱で、刀身がすっぽり抜け落ちてしまったらしい。

砲弾が炸裂し、地面が揺れた。火炎放射器と大砲らしい、と彼は思った。

それでも、十数名が這い出してきた。あとの者は即死か、それに近い状態だろう。

「突っ込むぞ！」

枯枝を片手に彼は叫んだ。だが、歩き始めると、急に道が左右にジグザグに曲り、足が進まない。

——お先に参ります！

若い兵隊が彼を追い抜きながら叫んだ。くそっ、と言って、手榴弾のピンを抜いた。

とたんに、若者は、手榴弾ごと、味方の掘った〈掩壕（タコツボ）〉に落ちた。鈍い炸裂音がして、穴の中は静かになる。

おれは酔っている、と少尉は思った。なにが起っても、少しも悲しくない。気分はいいのだ。ただ、眼がまわるのが問題ではあるが……。

上機嫌なのは少尉だけではなかった。全員が笑っていた。片腕を吹っとばされて、笑いこけている者もいた。木刀、熊手、箒などを手にした彼らは、転（こ）けつ転（まろ）びつ、敵軍陣地に向っていた。出てこい、ニミッツ、マッカーサー、と歌って、発狂したように甲高く笑う声が砂浜に響いた。

照明弾に照らし出された、これまでに見たこともない陽気なバンザイ突撃は、米海兵隊員たち

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.